
eturanちゃん

sofaisco

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

eturnちゃん

【Nコード】

N8390X

【作者名】

sofaisco

【あらすじ】

はじめてのインターネットデビュー失敗例。

放送の1（前書き）

ジャンルは一応恋愛とありますが、ちょっと遠まわしな感じです。
自分で物語を書くのは初めてで、まだ慣れません。

放送の1

「現在の閲覧者数は 0 人です」

ああ、数字ってやつはいつだって無情。

僕はいささか暖まりすぎていたテンションをクールダウンさせようとする。

気づいたら脱いでしまっていたTシャツを、（ついでにズボンも）拾い上げ、袖を通した。

ふう。なんだか服をきたらこう、少し冷静になってきたぞ。

深呼吸をしつつ、まだいまいち慣れない我が城（というか、マンシヨンの一室）を見渡す。

まず、貧乏な一人暮らしだというのに、妙に広い。

しかも最近リフォームしたとかで全体的に輝いている。

まだいくつかダンボールは残ってるが、とりあえず商売道具だけはダンボールから出して、棚に並べてある。

ここからは見渡せないが、奥にはこれまた綺麗なバスルームとトイレもあるし、キッチンもある。しかも冷蔵庫と洗濯機は備え付けだった。

「・・・これで家賃1万はおかしいよなあ・・・。」

「コレデイチマンエンスカ?!」

?!

今何か聞こえたような・・・?!
なんか、すつげーロボットっぽい声・・・!
そっぴや僕がこの物件にしたいと不動産屋さんに言ったとき、

「マジで?!ここにしてくれるの?!いやー、困ってたんだよこの
幽霊ぶつけ・・・ゲフンゲフン!とにあく、助かるよ!じゃあほら、
これ書類!」

って妙に喜んでたんだよな・・・。

お金をあんまりもってないのに、こんな最高の物件が借りられるな
んで、流石東京・・・!とか思ってたんだけど、もしかして・・・。
。

「きゃあああつあ!!お、オバケさんですかあ・・・!?!」

「オバケ・・・?イヤ、アノ、コレホラー系ノ放送ナンデス力・・・
?!」

え、放送・・・?

声がした方をむいてみると、そこには先日友人から貰った少し古い
型のパソコン。

画面を覗きこむと、こう表示されていた。

「現在の閲覧者は 1 人です」

放送の2（前書き）

流れとかは考えてありますが、まだ手探り。自分で物語を書くのは難しい・・・。

放送の2

「現在の閲覧者数は 1 人です」

画面に表示された文字を見て、思わず僕は「おおお！」と声を上げた。

かれこれ2時間、最初は自作曲を流しながら2日間かけて必死で考えた「クスッと笑える日常の出来事」を話していたけど、一向に増えない閲覧者数に腹がたつて、後半は思わず服を脱いで踊ったり、その状態で小学生の頃好きだった女の子の名前を叫びながらエアー告白とかしてもずっと0人だったのに……！

「それは嬉しいけど結局さっきの声はなんなんだよおおおおお！」

そう！今は閲覧者数とかよりも気になることがある！

この、妙に家賃の安かった一室の、どこから聞こえた謎のロボっぽい声。

下手をしたら、さ、最悪呪い殺され……？！

「ひiiiiiiii！悪霊退散、実家から持ってきたあのお守りはどこ……？！」

「悪霊……？声……？モシカシテ、「ボー読みちゃん」ノコトデスカ……？ドウヤラ、設定シテアルミタイデスシ……。」

「そう、こう、棒みたいな形した木彫りのお守り……！！……って設定？」

もう一度、声のした方を見ると、どうやらパソコンのスピーカーか

ら聞こえてきているようだ。

もう一度画面を注意深く見ると、横にあるコメント欄というところ
にいくつかコメントが書き込まれているのが見える。

「あれ・・・？これ、さっき聞こえて来た声が言ってた言葉だ・・・。
もしかして、コメントをさっきから誰かが読んでくれて・・・、
ってこの部屋僕しか・・・!!」

「ダカラ、コノ声ハ アナタノパソコン ガ コメント ヲ読ンデ
ル声デスヨ・・・。自分デ生放送ヤッテルノニ、ソナナコトモ知ラ
ナインデスカ・・・？」

・・・・・・??

「え、つまり、僕のパソコンがここに来たコメントを読んでくれ
るってこと?!」

「マンマ私が言ッタコト繰り返シマシタネ。ソウデスヨ。」

え、そうなの？今のパソコン、凄い・・・。

緊張していたのか強ばっていた身体から力が抜けて、僕は思わずへ
タリ込んだ。

パソコンのセッティングは全部前の持ち主である友人に任せていた
ので、何も把握していない状態だったのだ。

しかし、ということは今の今まで僕は見知らぬ人の前でこんな、情
けない姿を晒したということに・・・？と凹んでいるところに、ま
たもあの声が聞こえて来た。

「フアアアア・・・。何モヤラナイシ、ツマラナイデス・・・。モ

ウソロソロ、私ハオチマスネ・・・」

「ちょ、ちょっと待ってええええ！今、今ナイスな笑える小唄をしますから、もう少し、もう少し待って！！ええっと、なんだっけ・・・！なんてこつた頭が真っ白に・・・？！」

あたふたしてる間にも、閲覧数が点滅（しているような気）が！とりあえず、僕は横に置いてあるオーディオのリモコンに手を伸ばし、場繋ぎ的に再生ボタンを押し、なんとか言葉を紡ぎ出そうと試みる。

「えっと・・・、そうだ思い出した！えっと、この前、テレビのリモコンをですね・・・！」

僕が二日かけて考えた、「クスッと笑える小唄」を始めると、それを遮る様に「ボー読みちゃん」が声を発します。

「モウ、本当二眠・・・。オヤ、ナンダカ面白い音楽ガ流レテマスネ・・・。」

「そう、リモコンを眠りにつかせて、親なんだが、面白い音楽を・・・。・・・え、この曲ですか？」

なんとなく閲覧者様がこちらに興味を持ってくれたのを感じ取り、僕は姿勢をただす。

「クスッと笑える小唄」が出来ないのは少し寂しいけど、お客様至上主義に徹することにしよう・・・！

「コノ曲、ダレノ何テ曲デスカ？」

「えっと、この曲は・・・、すみません。曲名はまだないんです。あと、これは僕の作った曲です。」

「ナンダカ、眠ル前二聴クノニ ピツタリ ナ感ジデスネ。」

「ありがとうございます！そういう注文に備えて作ったので、そう言われると嬉しいです！」

知人や友人から自分の作った曲を褒めてもらったことはあったけど、見知らぬ人からこうやって感想を言われるのは新鮮で、思わず頬が緩んだ。

これがインターネットの楽しさなんだろうか。

「エエ、次ノ放送ハ、モット音楽ヲ流シテ欲シイデス。ソレデハ。」

「あ、ちょっと待、・・・・。」

僕が何か意味のある言葉を発する前に、再び0になる閲覧者数。しかし、次の放送を期待するようなコメントをしてくれたような・・・。

「・・・これ、次も来てくれるってことかな・・・？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8390x/>

eturanちゃん

2011年10月23日03時08分発行